



ニュージーランド・クライストチャーチ地震の被災地を訪ねて

荏本 孝久

1. はじめに

2016年度から始まった共同研究「アジア・オセアニア地域の自然災害による復旧・復興過程と社会的影響」における現地調査で、2018年2月27日から3月8日の期間にニュージーランド・クライストチャーチ地震の被災地を訪れる機会を得た。ニュージーランドは南半球に位置し、日本からの飛行時間は首都オークランドまで約10時間で、オークランドから南島の北部に位置するクライストチャーチまでは国内線で約1時間である。ニュージーランドの人口は約400万人で、オークランドは約100万人、クライストチャーチはニュージーランドで二番目の都市であるが人口は約40万人である。日本との時差は4時間である。従って、飛行機は赤道を越えて一路太平洋上を南へ南下する。

クライストチャーチを訪れたのは、今回で3回目であり、最初は1995年に訪れたことがある。オーストラリアのメルボルンで環太平洋地域国際地震工学会議が開催された折に、クライストチャーチにあるカンタベリー大学の地震工学センターを訪問した。カンタベリー大学は地震工学の先進的な研究が行われ数々の実験装置により耐震技術の向上に寄与する先進的な研究が進められていた。次は2000年にオークランドで開催された世界地震工学会議に参加した際にもカンタベリー大学を訪問した。その当時からニュージーランドでは、人の数より羊の数の方が圧倒的に多いと言われほど酪農が盛んな農業と観光を中心とした国であると紹介されていた。クライストチャーチの中心市街地は、市内をエイボン川が緩やかに蛇行して流れる典型的な沖積低地に立地し、公園や教会が多く散在し、その中でも歴史的な大聖堂を中心とした市街地が形成され、気候も良く爽やかに落ち着いた雰囲気を見せていた。路面電車が走る中心市街地から郊外へ至る道筋には、古い石積みの建物と1階建ての木造建物が並び、どこことなく牧歌的な街並みを呈していたという印象を持っていた。

ニュージーランドの国土を大きく分断する北島と南島の間には、日本と同様にプレート境界が存在し、東側の太平洋プレートが西側のオーストラリア・インドプレートの下に潜り込んでいる。このプレート境

界付近には、過去にも多くの大規模な地震が発生している。ニュージーランドは日本と同様に地震多発国なのである。

アジア・オセアニア地域は、地球の表面を取巻くプレート構造が作り出す自然環境から、地震が多発する地域であり、特にアジア地域は活発な地震を伴う自然環境により、大規模な地震災害が発生して、多くの人的・物的被害が集中している。これらの国々は、経済的進展が遅れている開発途上国も多く、復旧・復興に掛かる費用が重い足枷となって、その期間が長く掛り、震災後の社会的および経済的に大きな打撃を受け復旧・復興が進まない状況があると言われている。

本共同研究は、アジア・オセアニア地域における自然災害の社会的影響と復旧・復興過程を調査することを目的としており、昨年度は2016年度ネパール・ゴルカ地震による首都カトマンズの被害と復旧・復興過程の現地調査を行い、今年度はニュージーランド・クライストチャーチ地震の復旧・復興過程と社会的影響について現地調査の目的で訪れた。

2. クライストチャーチ地震と被災状況

今回の調査の対象としたニュージーランド・クライストチャーチ地震は2011年2月22日12時51分(現地時間)にニュージーランドのカンタベリー地方で発生しマグニチュード(Mw)6.1の地震であった。この地震が発生した2011年は3月11日に日本の東北地方太平洋沖でMw9.0の超巨大地震であった東日本大震災が発生した年であり、その2週間程前に発生し、現地クライストチャーチを中心に多くの人的・物的被害を伴う大災害となった。また、この地震の前年2010年9月にも近くでMw7.0の地震が発生し、一昨年の2016年11月14日午前0時2分(現地時間)にはクライストチャーチの北方約200kmのカイコウラを震源とするマグニチュード7.8(アメリカ地質調査所USGS発表)の強い地震があり、多くの余震が発生しており、クライストチャーチ周辺での地震活動が活発となっている。

震源はクライストチャーチ近郊のリトルトン付近で、震源の深さは約5kmであった。この地震以降に